The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学初年次における授業デザインの構築 ： 協調学習のエスノグラフィーより
Author(s)	森, 朋子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49215
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【２】

氏　　名	森（もり）　朋子（とも こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２１５０５　号
学位授与年月日	平成 19 年 6 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	**大学初年次における授業デザインの構築－協調学習のエスノグラフィーより－**
論文審査委員	（主査） 教　授　岩根　　久 （副査） 教　授　中　　直一　　教　授　岩居　弘樹

論　文　内　容　の　要　旨

なぜ大学で初修外国語を必修で学ばなくてはならないのか。なぜやりたい人だけが学ぶ、完全選択制ではないのか。

本論文は、学生から発せられた〈なぜ大学で新しい外国語を必修で学ばなくてはならいのか〉という問いをそのまま大きな研究課題とするものであり、その答えを言語教育の視点から捉えるのではなく、本質的に実践現場の学びの場としての授業に貢献することを目的に、教育学からのアプローチを試みる。そして授業環境デザインとインストラクショナルデザインという２つの観点から初年次初修外国語教育の授業デザインと考察する一つの例として、本論文ではドイツ語教育を詳細に検討する。

１章ではドイツ語の授業でも、大学における授業に限定し、その意義の歴史的変遷を追う。日本のドイツ語教育は、実学から教養へとその意義を変容させながらも、常に〈言語を習得する、言語構造を理解する〉という立場は不動であった。それは初修外国語教育が教養教育であってもある一定の独自性を保持していたからであり、比較的、教養教育研究や教育学の影響を受けにくいことも理由の一つとして挙げられる。しかしそれでは一般語学学校でのドイツ語授業と、明らかな差異が認められないことから、本論文では大学だからこそ実現できる外国語教育をドイツ語を例に検討することを試みる。

２章では、学生が教養教育の第２外国語教育に抱く思いや、その位置づけを、フォーカス・グループインタビューという手法を使って抽出した。その結果、以下のことが明らかになった。

１）概ね、学生がドイツ語を選択した理由は受動的であること
２）学生の中で、第１外国語の英語と第２外国語のドイツ語ではその位置づけに大きな差がみられること
３）既習外国語、この場合は第１外国語の英語であるが、それに比べて、学生が教師から受ける影響は大きいこと
４）ロールプレイではなく、ドイツ語を用いた必然性の高いコミュニケーションが望まれること。
５）学生が、大学卒業間際になって、自律能力・コミュニケーション能力など一社会人として基本となる能力が不足していると認識していること

このように社会的ニーズとして中央教育審議会の答申『新しい時代における教養教育のあり方』から理解される教養の重要な要素は、学生からの要望でもあったことが分かった。このような双方が求める教育的効果は、他者の存在

をなくしては実現が不可能であり、外国語学習を個人発達論から他者との関係発達論として、新しい視点で見直すよう主張する。

３章では、学習効果に加えて教育的効果が高いといわれる協調学習を、授業環境デザインとして初年次初修外国語教育に導入する可能性を論じる。協調学習は、単なる学習形態を指すのではなく、社会的構成主義の学習理論を背景として据えている。学習は個人の所産物であるとするこれまでの個人発達論的な学習観からパラダイム転換し、学習は社会的状況に大きく依存しており、対人・対物の関係性の発達の中から生まれることを理念としていることから、大学入学試験後の大学１年生に協調学習を導入するのは適切であると考えた。協調学習の教育的効果の中でも特に大学１年生に有効だと思われるのが、学習への動機付けとメタ認知能力の育成である。これまでの人間関係が一度崩され、新しく構築されるであろう大学１年生にとって、社会的動機である親和動機は、学生を学習への内発的動機に導く。これは学習という認知行動が、学習者の情意面に大きく異存しているからである。またメタ認知能力は一つの技能であって育成が可能である。しかし自らの学習スタイルを築くそのプロセスも、学習者の情意面からの影響を避けることはできない。そのような意味において、協調学習は認知、技術、情意面の３つが支えあう、包括的な学習理論であると言えるだろう。

さらに３章では実際に行われている協調学習の効果と問題点を抽出するために選択した調査方法のエスノグラフィーについて、その意義と調査観について述べる。

著者は参与観察によるフィールドワークを大きく２つに分けて理解をしている。第１は教室の出来事を観察して記述し、その文化的意味を解釈するエスノグラフィーである。この場合は、直接的な実践への関与は行われない。この際には、〈外〉からではなく、自らの影響も含め、間主観性を開示することになる。本論文では、協調学習を１年間観察し、その知見を得た４章のエスノグラフィーがこの種である。第２は批判的エスノグラフィーである。研究者によるアクション・リサーチとも言われる。この方法においては、授業研究をする研究者が実践を担当する教師と協働し、授業方法やカリキュラムの改革に関与し、その過程自体を研究方法とする。本論文内では５章がこれに当たる。このように授業実践に関わる研究者は、実践者である教師と活動の課題と文脈を共有している。研究者は、積極的に場に参加し、良い方向に改革しようと常に努力を行い、その関与の事実も踏まえて〈場〉と〈活動〉の変容の過程を観察し記述する。その際に、研究者自身も大いに影響を受け、自分自身の変容もその研究対象となりえる。その意味において、教師と研究者の関係は対等であり、一方的に教え教わる関係ではない。ともに学びあう関係なのだ。

４章ではＫ大学でのエスノグラフィーを記述した。著者は観察によって学びの共同体である学生コミュニティーの１年間の変化を追った。授業実践は担当教師のみ行った。授業が開始した直後に行ったインタビュー予備調査では、インタビューを受けたほとんどの学生が、与えられた〈大学生〉という社会的アイデンティティにあわせて、意識的に自らの学習方法を変えようとしていることがわかった。しかし同時に、長年、暗記中心の個人学習が身についているために、なかなかその転換は容易ではない。授業の中の必要性が明らかになった。また大学入学試験の結果が、入学以後の学習の動機付けに大きく影響を及ぼしていることもわかった。全ての学生が希望を持って大学生活をスタートさせているわけではない。心理的なケアが不可欠である。

このような状態でスタートした前期は、ほぼすべての学生が新しい人間関係を構築しなくてはならないことから、協調学習の中でも親和的動機付けの影響が色濃くでる半年になった。休み時間のみならず、授業中であってクラスメイトとの相互関係の上に学習が成り立つため、少人数制授業が少ない大学１年生の教養教育においては、この調査対象のドイツ語授業が、高等学校時のホームルームのような役割を担った。このためにドイツ語学習にはそれほどの意欲がなくとも、仲間に引きずられてドイツ語学習を〈ついついしてしまう〉状態が観察された。

夏休み以降の後期には、学生は大学生活において、ドイツ語授業以外の居場所が多くなってきた。ホームルーム化が崩壊していく。元々学習動機がそれほど高くない学生は、親和動機の求心力が弱くなるにつれて、ドイツ語授業そのものへの興味も薄れていった。このように前期には、大きなひとつの学習共同体であったクラス内の学生たちが、その状況に合わせてグループ化されていく。このことにより、学生がドイツ語授業をどのようにポジショニングしているかが明らかになった。学生自身とドイツ語授業の間にかかっているフィルターの数が少なければ少ないほど、その学習者の学習への動機付けは状況によって左右されない。その場合は、将来の自分とドイツ語学習が直結している場合のみで、それ以外の学生は、ほとんどがクラスメイト、教師、学習課題などの要素のフィルターによって、その日の学習が左右されている。

必修の初修外国語では、この学生たちの状況を参考にして、授業デザイン、またインストラクショナルデザインを整える必要があると考えられる。

４章で得た知見を参考に、５章では実践の現場であるＯ大学の必修第２外国語としてのドイツ語に、協調学習の授業デザインを導入した。またインストラクショナルデザインでは、メタ認知能力の育成を中心に、６種類の仕掛けを授業内に導入した。それらの仕掛けや授業デザインの効果を常に形成的に評価し、常にインストラクショナルデザインを調整するために、一般的なADDIEモデルの中でも、評価に重きを置くGagneのADDIEモデルをインストラクショナルデザインとして採用した。その結果、プロジェクト前のアンケートでは、ドイツ語学習に積極性があまり見られない学生たちであったが、プロジェクト後アンケートでは96%以上の学生が〈積極的に参加した〉以上の自己評価を行っている。また社会に直結した授業デザインとしての協調学習は、学生の新しい学習観を提示し、初年次教育として大きな役割と果たしたと思われる。これらの教育的効果は、十分学習効果にも影響をしていると考えられるが、発音に重点を置いた今回のインストラクショナルデザインでは、認知領域の代表ともいえる文法理解への効果は調査対象に入っていなかった。この点を次回のデザインのニーズ分析とし、２年目にはより改善されたインストラクショナルデザインを目指した。このようにデザインの循環的評価を繰り返し、さらにデザインの洗練化をすることによって、ケーススタディーである事例研究からひとつの新しい理論構築が可能となると考えられる。

本論文はこのように前半で初年次初修外国語教育としてのあり方に関して知見を得て、後半には実際に導入したその過程を報告する。著者の立場も、静的な参与観察から、より動的な教師との協同と立場を変えることによって、教育における理論と実践の架け橋の一旦を担う研究活動を試みる。

論文審査の結果の要旨

森朋子さんの学位請求論文「大学初年次における授業デザインの構築－協調学習のエスノグラフィーより－」は、大学の初修外国語教育の現場から得られたデータをエスノグラフィー的手法を援用し分析することにより、大学における初修外国語の意義を教育学的な観点から明確に位置づけるとともに、その効果的な授業デザインのあり方を提起するものである。

本論文は、受講者たちが抱く素朴な疑問「どうして大学で初修外国語を学ぶ必要があるのか」を研究の出発点とする。まず、大学における初修外国語のひとつであるドイツ語に着目し、高等教育機関におけるドイツ語教育の様態を通時的に概観した後、現在の大学におけるドイツ語教育のあり方について検討するために、フォーカス・グループインタビューという手法を用いて受講者自身による初修外国語の位置付けを抽出する。ここで、論者は大学における初修外国語の意義を、他の語学教育機関における外国語教育や既修外国語教育と差異化すべく、人格形成期における転換教育としてとらえ、転換教育の要となる学習動機の内在化とメタ認知能力の育成に最も有効と考えられている「協調学習」という授業方法に着目する。そこで、まず、協調学習を導入しているＫ大学の授業をエスノグラフィーの手法を用いて綿密に分析し、問題点を明確化するとともに、新たな授業環境モデルを導出する。さらにその授業環境モデルに基づいた授業デザインを教員の協力のもとにＯ大学の授業に導入し、再びエスノグラフィーの手法を用いてその効果を評価し、ここから、インストラクショナルデザイン（教育手法）をコアとして、個々の授業環境（教員、学生、学習目標、物理的環境、カリキュラム等）に応じた授業デザインを循環的に構築するためのモデルを導出している。

本論文の分析において高く評価すべき点は、既成の理論を単に検証するのではなく、授業現場から得られるデータをもとに、批判的に新たなモデルを丹念に構築していく姿勢でる。論文前半においては「協調学習」という枠にとらわれすぎる論の展開となっている難点も見受けられるが、後半部においては、その欠点を克服しその枠を超えた結論を導出するに至っている。また、欲を言えば、論文付録資料をさらに有効に活用する論じ方をすれば、論の展開が堅固になったであろうし、ドイツ語以外の初修外国語のデータについても分析すればモデルの有効性も高まったであろうが、本論文はその成果を現場に還元し得る先駆的な研究として非常に高く評価できる。

以上により、本論文は博士号学位（言語文化学）論文として十分価値あるものであると認める。